

〈創立45周年シリーズ〉第6回

モーツァルト室内管弦楽団 第167回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester/167^e concert régulier

〈フランス音楽特集〉

2015年12月13日(日)午後2時 ■いずみホール

Dimanche 13 décembre 2015 à 14h Izumi Hall, Osaka

- 主催:モーツァルト室内管弦楽団 <http://moz-kam.org>
- 協賛:いずみホール[一般財団法人 住友生命福祉文化財団]
- マネジメント:大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

*ロビーでは大阪ユニセフ協会を通じて、世界の子どもたちのための募金活動を行っています。



モーツァルト室内管弦楽団 第167回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester/167^e concert régulier

2015年12月13日(日)午後2時 いずみホール

Dimanche 13 décembre 2015 à 14h Izumi Hall, Osaka

〈フランス音楽特集〉

ベルリオーズ◆聖三部作《キリストの幼時》より 第2部《エジプトへの逃避》

Hector Berlioz(1803-1869) : Trilogie sacrée “L’enfance du Christ” 2^{me} partie “La fuite en Egypte”

I. 序曲 Ouverture

II. 羊飼いたちの聖家族への別れ⁵⁾

L’adieu des bergers à la Sainte Famille⁵⁾

III. 聖家族の憩い³⁾

Le repos de la Sainte Famille³⁾

サン=サーンス◆チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33¹⁾

Camille Saint-Saëns(1835-1921) : Concerto no.1 en la mineur pour violoncelle et orchestre Op.33¹⁾

Allegro non troppo — Allegretto con moto — Tempo I⁰ — Un peu moins vite — Più allegro

* * *

フォーレ◆鎮魂ミサ曲(レクイエム) 作品48^{2,4,5)}

Gabriel Fauré (1845-1924) : Messe de Requiem Op.48^{2,4,5)}

I. 入祭唱とキリエ／Introit et Kyrie

II. オッフエルトリウム／Offertoire

III. 聖なるかな／Sanctus

IV. 慈しみ深きイエス／Pie Jesu

V. 神の子羊／Agnus Dei

VI. われを救いたまえ／Libera me

VII. 樂園にて／In Paradisum

チェロ:藤森 亮一¹⁾／Violoncelle:Ryoichi Fujimori¹⁾

ソプラノ:田中 希美²⁾／Soprano:Nozomi Tanaka²⁾

テノール:福田 清美³⁾／Tenore:Kiyomi Fukuda³⁾

バリトン:萩原 寛明⁴⁾／Baritone:Hiroaki Hagiwara⁴⁾

合唱:モーツァルト記念合唱団⁵⁾／Chœur:Mozart Choral Ensemble⁵⁾

管弦楽:モーツァルト室内管弦楽団／Orchestre:Mozart-Kammerorchester

コンサートマスター:釋 伸司／Premier violon:Shinji Shaku

指揮:門 良一／Direction:Ryoichi Kado

《フランス音楽特集について》

モーツァルト室内管弦楽団は〈フランス音楽特集〉というのを年1回くらいやってきているが、それはドイツ音楽がベートーヴェン以降その内容やオーケストレーションがどんどん分厚く重くなっていくのに対し、フランス音楽は軽やかで形式もすっきりしたものが多く、あたかもフランスの作曲家たちがモーツァルトの精神や様式を受け継いでいるかのように思える、という理由によっている。実際、サン=サーンスは「フランスのモーツァルト」と呼ばれたし、ラヴェルはその代表作のひとつ、ピアノ協奏曲の作曲にあたって「モーツァルトとサン=サーンスの精神で書いた」と言っている。また、ブーランクはモーツァルトのスタイルを模倣した作品をいくつか残している。

■ベルリオーズ：オラトリオ《キリストの幼時》

より第2部《エジプトへの逃避》

代表作《幻想交響曲》で知られるベルリオーズは、その破天荒なロマンティシズムや巨大なオーケストレーションによって、上述したようなモーツァルトの系譜にあるフランス音楽の作曲家とはみなされないのではないかと、思われる方が多いであろうが、本日演奏する《キリストの幼時》を聴いていただければその思い込みは一新されることと信ずる。《キリストの幼時》は本日演奏する第2部《エジプトへの逃避》が最初に作曲されたのだが、ベルリオーズはそれを17世紀の架空の作曲家、ピエール・デュクレの作品を自分が発掘したのだと偽って発表した。それには自分につきまとっていた悪評を払拭しようという意図があったのである。幸いにもこの作品は好評で、その後この曲が彼の手になるものであることが明らかにされたが、その評価は変わることはなく、国外でも好評を得た。このことが、彼にその続編を書くことを思い立たせ、前編にあたる第1部《ヘロデの夢》と後編にあたる第3部《サイスへの到着》が加えられ、今日の3部作の形を整えたのである。こうした事情のため、彼の作品としては珍しく小編成のオーケストラで、飾り少ない素朴な表現が行われ、ベルリオーズの作品の中では極めて異色を放つものとなっている。

この第2部は、オーケストラのみによる序曲、混声合唱が加わっての《羊飼いたちの聖家族への別れ》、語り手(テノール)の独唱のついた《聖家族の憩い》の3曲から成って

いる。ベツレヘムの馬小屋に生まれたキリストとその両親の聖家族が、ヘロデ王の迫害を逃れてエジプトに向かう物語である。

《キリストの幼時》はベルリオーズの作品の中では極めて稀にしか演奏されないものとなっている。日本初演は1956年にジョゼフ・ローゼンシュトック指揮のNHK交響楽団によって行われたが、その後全く顧みられず、1992年に門良一指揮モーツァルト室内管弦楽団によって事実上の蘇演といえる全曲の関西初演が行われたのである。この演奏は大好評となり、その後3年間クリスマス・シーズンに連続して演奏され、2003年のベルリオーズ生誕200年においても1度演奏され、計5回演奏された。モーツァルト室内管弦楽団の定番のひとつとなったのである。(この項において、1992年の関西初演時に監修をお願いしたベルリオーズ研究者、久納慶一氏のプログラム解説から一部を引用させていただいた。)

■サン=サーンス：チェロ協奏曲第1番イ短調作品33

サン=サーンスは早熟の天才で、モーツァルト以来の神童と言われ、作曲家、ピアニスト、オルガニストとして活躍した。また、文学、天文学、絵画など他の領域でも一流の才能を発揮したと言われている。音楽の広い分野で多くの作品を残し、保守的な作風と形式主義が云々されることはあるが、フランスの音楽史において最大の作曲家であることは、ベルリオーズを別格とすれば、間違いのないところであろう。協奏曲の名曲が多い点はモーツァルトの後継者と言ってよいかと思われる。

チェロ協奏曲第1番は1873年、作曲者38歳の作品である。リストから学んだ循環形式がさらに徹底されて単一楽章の曲となっているが、全体は3つの部分から成っていて、両端の部分がほぼ同じ楽想で出来ており、間を置かず続けて演奏される。ロマン性は豊かなのだが表現は控えめで、いかにもサン=サーンスらしい端正な音楽となっている。

ところで、サン=サーンスは多くの作品を残しているのだが、どうも当たり外れが激しい作曲家のように思われる。ピアノ協奏曲第1番、第3番、ヴァイオリン協奏曲第1番、第2番、チェロ協奏曲第2番といった曲をお聴きになった方がおられるだろうか。交響曲でも第3番「オルガン付き」だけが有名で、第2番がごくごく稀に演奏されるのみである。有名曲とそうでない曲との差があまりにも大きい。

■フォーレ: 鎮魂ミサ曲(レクイエム)

1887年から1890年にかけて作曲されたフォーレの代表作である。オーケストラ編成や楽曲構成の異なる3つの稿があり、初稿はオーケストラが低音弦楽器とハープ、オルガン、ティンパニという室内楽的な小編成であった。出版社が通常のオーケストラ編成にしないと演奏機会が得られにくいと忠告したため、これを受け入れて各2本の木管楽器(オーボエなし)、4本のホルン、2本のトランペット、3本のトロンボーンと2部のヴァイオリンを加えて第3稿とした。今日では通常この稿が演奏されている。編成そのものは大きい、各楽器の使われ方が非常に限定的で、曲中で全部の楽器が鳴り響く壮大な音響の箇所はほとんどなく、初稿の室内楽的な雰囲気が残されている。

フォーレはサン=サーンスの弟子であるとともに友人であり、またラヴェルの師でもあったので、フランス音楽史の主流を担ったと言っていいであろう。作風はサン=サーンスに似て控えめで古典的であるが、ところどころでびっくりするような新しさが現れるのがおもしろい。5年ほど前のこの欄

に書いたのだが、フォーレの音楽にはennui(アンニュイ)というフランス語が当てはまるように思う。en nuit(夜に)が語源とされるこの言葉は、辞書を引くと「心配」、「困惑」といった意味の他に「倦怠」、「もの憂さ」という意味もあるようで、フォーレの作風はこの語で言い表すことができるように思うのである。彼の作品では師のサン=サーンスから受け継いだしっかりした形式の中に、上述したびっくりするような新しさや、思いがけない俗っぽさが実に無造作に顔を出すことが多く、その無造作さにアンニュイということばがぴったりだと思えるのだ。このレクイエムはまさにそういった新しさと俗っぽさが渾然一体となった曲で、それゆえにこそフォーレの代表作として今日まで人気を保っていると言えよう。モーツァルト、ヴェルディの作品とともに「3大レクイエム」と言われているようだが、フォーレのレクイエムは最終曲が異例の「楽園にて」であるなど、全体に癒しに満ちた優しい音楽となっており、「自分の葬儀にはフォーレのレクイエムを流してほしい」という人が多いのもむべなるかなである。

今後の演奏会のご案内

《第168回定期演奏会》

〈創立50周年に向けてシリーズ〉第1回
2016年1月10日(日)午後3時●いずみホール
〈モーツァルト・オペラシリーズ〉第12回

モーツァルト:《魔笛》K.620
全曲・演奏会形式・字幕付き原語上演

ザラストロ: 松下 雅人
タミーノ: 諏訪部 匡
パパゲーノ: 西尾 岳史
弁者、僧: 萩原 寛明
第一の侍女: 津山 和代
第三の侍女: 山田 愛子
第二の童子: 山田 千尋
第一の武士: 西垣 俊朗
合唱: モーツァルト記念合唱団(合唱指揮: 益子 務)
コンサートマスター: 釋 伸司
指揮: 門 良一
制作: 西垣 俊朗、益子 務、門 良一

夜の女王: 四方 典子
パミーナ: 鬼一 薫
パパゲーナ: 西田真由子
モノスタス: 橋本 恵史
第二の侍女: 櫻井 孝子
第一の童子: 朴 華蓮
第三の童子: 麻生 真弓
第二の武士: 西垣 俊紘

《第169回定期演奏会》

定期サロンコンサート〈クライネモーツァルト〉第87回例会
2016年4月23日(土)午後2時 天満教会
〈フランス音楽特集〉—木管五重奏名曲集—

イペール 木管五重奏のための3つの小品
ミヨー ルネ王の暖炉
ルーセル ディヴェルティスマン Op.6
フランセ ビヤホールの音楽(別名: 恋人たちの時間)
ブーランク 六重奏曲

フルート: 大江 浩志
オーボエ: 福田 淳
クラリネット: 高橋 博
ファゴット: 佐伯 利之
ホルン: 佐藤 明美
ピアノ: 岩崎 宇紀
お話: 門 良一

★パーティやイベントを音楽の生演奏で★

モーツァルト室内管弦楽団があなたのお手伝いを致します。パーティやイベントを音楽で盛り上げましょう。

小は二重奏から大は40人のオーケストラまで、ご予算に応じた編成をご提案します。曲目等のリクエストにも応じます。

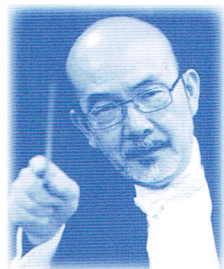
お問い合わせはお気軽に下記までどうぞ。

モーツァルト室内管弦楽団事務局: 090-9286-9290

門 良一●指揮

Ryoichi Kado, *Dirigent*

1939年大阪生まれ。1962年京都大学理学部物理学科卒業、67年同大学院終了。京都大学オーケストラには学部、大学院を通じて10年間在籍し、フルート奏者、指揮者を務め、同オーケストラの発展に多大な貢献をする。また、客演指揮者の故近衛秀麿、故朝比奈隆、故岩城宏之、故若杉 弘、故奥田道昭、秋山和慶各氏等のもとで副指揮者を務め、薫陶を受ける。70年モーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり、同楽団を日本有数のプロ室内オーケストラに育て上げた。モーツァルト、ハイドン等の古典派の作品を35人の室内オーケストラで優雅に繊細に演奏する独自のスタイルを確立している。企画力にも優れ、モーツァルトの「予約演奏会の再現」やオペラ《イドメネオ》の世界初ノーカット上演などの大きな企画を成功させている。また、世界的名手との協演も多く、ピアノのマリア=ジョアオ・ピリス、シプリアン・カツァリス、ヴァイオリンのライナー・キュッヒル、ホルンのペーター・ダム等との協演においてはソリストの絶大な信頼を得て大成功を収めている。近年は古典派だけでなく前期ロマン派やフランス音楽においても、企画、演奏両面で注目すべき成果を上げている。アマチュアの指導にも熱意を持ち、京都産業大学神山交響楽団の音楽監督・常任指揮者を創立時より務めている。モーツァルト研究者として知られ、1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにおいて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。



藤森亮一●チェロ Ryoichi Fujimori, Cello

1963年京都に生まれる。11歳よりチェロを学び始める。京都市立堀川高等学校音楽科(現、京都市立京都堀川音楽高等学校)を経て、1982年東京音楽大学に特待生で入学。同年第29回文化放送音楽賞を受賞。1983年第52回日本音楽コンクール・チェロ部門第1位。1986年第21回東京国際音楽コンクール弦楽四重奏部門・斉藤秀雄賞受賞。1987年、NHK交響楽団に入団。1990年ドイツに留学し、ミュンヘンでさらに研鑽を重ねる。これまでに、故・徳永兼一郎、上村昇、河野文昭、ワルター・ノータスの各氏に師事。1998年モルゴア・クアルテットとして村松賞を受賞。1999年東京オペラシティにおいて無伴奏チェロ曲によるリサイタルを行う。また同年カザルスホールにて「P.カザルスに捧げるチェロ連続演奏会」に出演し、いずれも絶賛を浴びる。2000年より、チェロ四重奏「ラ・クアルティエーナ」を結成。演奏会のチケットが入手困難なほど、好評を博している。2007年度第26回京都府文化賞功労賞を受賞。2010年度モルゴア・クアルテットとしてアリオン賞を受賞。現在、NHK交響楽団首席奏者を務めるかたわら、ソロやアンサンブルの領域でも意欲的な演奏を繰り広げ、国内外のアーティスト等と活発に共演。レコーディング活動においては、ソロはもちろん、さまざまなアーティストから絶大な信頼を得ている。現在、東邦音楽大学特任教授、国立音楽大学客員教授、東京藝術大学非常勤講師を務め、後進の指導にあたっている。

福田 清美●テノール

弘前大学教育学部音楽科卒業。パリ・エコール・ノルマル音楽院首席修了、最高演奏家資格取得。フランス声楽名誉教授連盟国際音楽コンクール第1位他多数の国際コンクールに入賞。88年文部省派遣研究員(派遣地パリ)。94年藤堂音楽賞受賞。10年にわたり関西二期会「フランス歌曲の流れ」をプロデュース。11年から関西二期会シリーズ「フランスの声」公演監督。2000年パリにてD.Lemoine女史と歌曲共同研究、CD[Mémoires Françaises]をリリース。2008年度青山音楽賞(バロックザール賞)受賞。東京日仏音楽コンクール、いかるが音楽コンクール審査員。奈良教育大学大学院教授。京都市立芸術大学、相愛音楽大学各非常勤講師。



田中 希美●ソプラノ

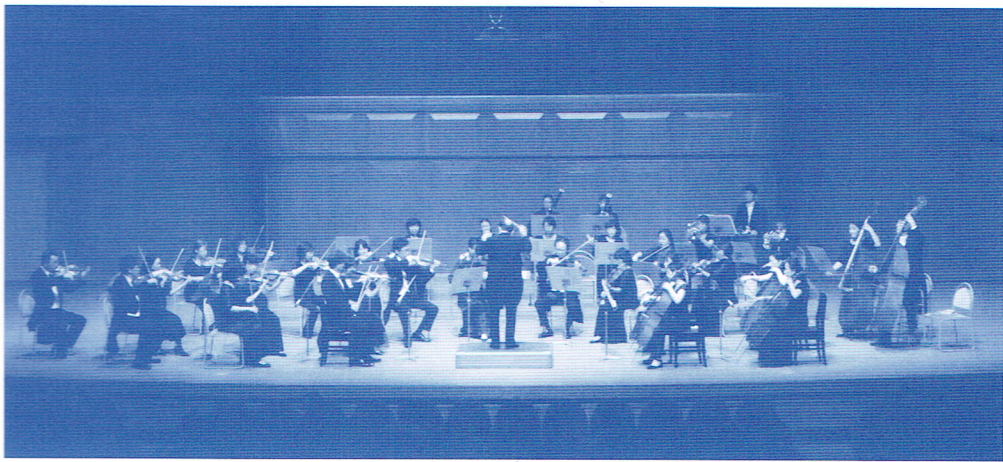
相愛大学音楽学部声楽専攻卒業、同大学研究科修了。ドイツ・ケムニッツ歌劇場より招聘され、「魔笛」夜の女王でドイツデビュー。オペラでは特にコロラトゥーラのもの得意とし、バロックから現代物までとレパートリーも広い。またその澄んだ声質を生かし、宗教曲・合唱曲のソプラノリストとしても活躍している。現在では、ヴォイストレーナーとしても高い信頼を得、多くの若いソリストや合唱団、高校・大学のサークルの指導にもあたっている。関西二期会正会員。



萩原 寛明●バリトン

京都市立芸術大学大学院修士課程修了。ウィーン国立音楽大学卒業。関西二期会「ドン・ジョヴァンニ」のタイトルロールをはじめ、数多くのオペラに出演する他、新国立劇場地域招聘公演「ナクソス島のアリアドネ」の音楽教師役で好評を博す。第九やオラトリオ等のソリストとしても活躍し、著名指揮者やオーケストラとの共演も数多い。現在、神戸女学院大学、兵庫県立西宮高等学校音楽科各講師。関西二期会、日本シューベルト協会、西宮音楽協会各会員。





モーツァルト室内管弦楽団 Mozart-Kammerorchester Japan

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、45年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シブリアン・カツリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シティオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07~09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09~11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を、また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を開催している。

●メンバー	コンサートマスター	釋 伸司				
第1ヴァイオリン	釋 伸司	本多 智子	松本 紗希	北村 奈美	森住 憲一(ヴァイオラ兼)	
	中野 瑞己	大西 秀朋				
第2ヴァイオリン	中川 敦史(ヴァイオラ兼)	都築紗智子	川島多美子	田原口安代	幣 晴代	
	清水めぐみ					
ヴィオラ	道幸 明美	三上 哲	白木原有子	灘儀 育子	酢谷 恭子	
	坂元 彰子					
チェロ	日野 俊介	野田 祐子	大西 泰徳	石塚 俊		
コントラバス	土屋 綾子	松本 友樹	北田 由美			
フルート	大江 浩志	廣永 美優				
オーボエ	上品 絢香	長島 加奈(イングリッシュホルン兼)				
クラリネット	高橋 博	門 小夜子				
ファゴット	佐伯 利之	倉永 晴美				
ホルン	佐藤 明美	林田 優惟	友田 拓	岡林由希子		
トランペット	大西 由起	森下 智稔				
トロンボーン	山田 貴之	仁科 美咲	中村 洋行			
ティンパニ	福井 鈴					
オルガン	木島美紗子					
ハープ	石井 理子					

モーツァルト記念合唱団●合唱 *Mozart Choral Ensemble*

1991年にモーツァルト室内管弦楽団の要請を受け特別編成された合唱団。女声は若手プロを中心に、男声は合唱王国関西の著名合唱団の指揮者、パートリーダーに参加を要請、1991年7月に益子務氏の指揮のもと発足、同年12月モーツァルト没後200年を記念してモーツァルト室内管弦楽団第48回定期演奏会でモーツァルトの「レクイエム」を協演後、毎年協演を重ねる。93年初の単独自主公演でジャンヌ・ワグナー氏を客演指揮者に迎え、「ロジェ・ワグナー・メモリアルコンサート」を開催。98、2000年ベルギー・フランドル政府の招きで文化交流使節として2度にわたりベルギー演奏旅行を行い、ブリュッセルのサン・ミッシェル大聖堂での演奏、FM-3での放送などで大成功を収めた。2000年設立10周年記念にCD「ロッシェニ小荘厳ミサ」をリリース。2010年には神戸で行われた日本音楽療法学会での大会長公演、2011年モーツァルト室内管弦楽団との合唱団創立20周年記念コンサートに引き続き、2012年には合唱団の自主公演として20年の歩みを記念したコンサートをいずみホールで開催。

●メンバー (*:天使の声)

ソプラノ	古結 洋子	酒井志奈子	酒井よう子	島谷 陽子	銭田 美幸
	谷本 由美	友金 郁子	中田 佳代	野口 歩	平芳真寿美*
	裕井ひとみ	御池あゆみ	山本 真紀*	渡邊 智子	
アルト	以倉安希子*	井村 園子*	大矢喜久子	佐野 康子	田中 薫
	外山 有香	中口真由美	中谷 典子	中根 佳江	林 理恵
	森田 裕子				
テノール	スガ・アルトムソズ	岡本 弘信	桑田 明和	近藤 達夫	陶山 悟嗣
	中村 達雄	古川 完	吉田 均		
バス	小島 博	杉野 文昂	二階堂哲雄	野村 透	長谷川良隆
	秦 大	林 龍太郎	ピーター・フィンク	米岡 実	渡邊 守



益子 務●合唱指揮 *Tsutomu Masuko / Chor-Dirigent*

1965年に京都大学卒業後、同大学院に進む。インディアナ州立ポールステイト大学院で声楽修士号、同大学院博士課程修了。武庫川女子大学音楽学部にて31年間勤め、学生及び後進の指導にあたる。2009年3月同大学教授を退任。その間、芸術学、音楽心理学、教育学の分野の研究に取り組み、研究テーマには「オペラ演出における現代性の研究」「重度障害者に対する音楽療法評価方法」などがある。著書「音楽療法と行動変容 その音楽的要素の検討」(1995)。

